森林整備Ⅱ

森の健康診断：意義と実践
～100 円グッズによる森林調査～

日時：平成２５年１０月１３日（日）　１０：００～１５：００
講師：丹羽　健司（矢作川水系森林ボランティア協議会代表）

概況

森林整備Ⅱ　森の健康診断:意義と実践
矢作川水系ボランティア協議会代表　丹羽健司

午前は、矢作川水系ボランティア協議会の方々と共に A,C,D,E の4班に分かれ、現地調査が行われた。
各班は調査地を設定し、中心木を決めて幹の１．3mの高さでテープを巻いた。
人工林の植生調査として、中心木周辺の5×5㎡の調査枠をロープで張り、人工林の種類、斜面の向き、斜面傾斜角、落葉層の状況、腐植層の状況、草と低木の種類数、１．3m以上の樹木（植栽木以外）の被覆率と種類数・胸高直径の調査がなされた。
混み具合調査として、枯損木・タケの有無、植栽木の胸高直径、中心木の樹高（スチール巻尺）、中心木と平均直径木の樹高（尺蔵）の調査がなされ、それぞれの値から林分形状比、ha 当たり本数、平均樹間距離、相対幹距の計算がなされた。

午後からは、里山サテライトにおいて各班の調査結果の発表がなされた。
海上の森は45年生であり、平均樹間距離は樹高の2割近くなら健全である。各班は調査結果をもとに考察し、A,D,E 班はそのままでよいが、C 班は4本伐採が必要であると発表された。「保残木マーク法による施業計画の立て方」の資料が配られ、各班が1ha の持ち山を15年後・30年後にどうしていくか、ディスカッションが執り行われ

た。
　C 班は、今の木材では経費が見えないため基本的にはそのままにするが、間伐についてはボランティアを要請し、最終的には雑木林を目指し、憩いの場となるようにする、という発表がなされた。
　E 班は、半分を目安に残し、将来的に林業が再生しているかもしれないので、半分は「楽しむ山」として、実る広葉樹が多い山を目指す、という発表がなされた。
　D 班は、半分間伐をし、複層林を目指し、A 材は木材として、B・C 材はチップなどにする。間伐をする人は募集し、切ったヒノキをつかってもらい、家を建てる。50年で天然林になるようにする、という発表がなされた。
　A 班は、土地が悪く成長せず、傾斜がきつく危ないため、目立つところは天然林化するが、ボランティアによる間伐ではなく、巻き枯らし間伐を行い、シイタケの栽培林とし、倒した木は栄養となり、水源涵養林・保安林を目指す、という発表がなされた。

　その後、丹羽先生による総括、矢作川水系森林ボランティア協議会の紹介、恵那市における木の駅プロジェクトの事例の紹介などがなされた。